

実験小説から私小説へ

—— 美妙スキャンダルとゾライズム ——

坂井 健

はじめに

一、美妙スキャンダルと実験

二、当時のゾライズム受容

三、「実験」という語の意味

四、ゾラの「実験」

五、「実験」から私小説へ

おわりに

ゾライズムの本格的な移入は、明治三十四年小杉天外によつてなされ、このゾライズムと明治四十年ごろから盛んになつた自然主義文学との間には断絶があるとするのが普通の見方である。また、明治二十七年の美妙スキャンダルは、もつぱら美妙没落のきつかけとして注目されてきた。しかし、ゾライズムは、美妙スキャンダルの頃すでにかなり知られており、美妙の行動もゾライズムの実践とみなされていたことが分かる。美妙の行動は、ゾラという実験小説を、實際経験を觀察し記録したものと理解し、それを私小説的に実行しようとした結果であり、当時の文壇も同様に理解していたことが分かる。實際経験としての「実験」を重視する風潮は、その後も続き、私小説の發生に結びついたと考えられる。

はじめに

ゾライズムの本格的な移入は、明治三十四年小杉天外によってなされ、このゾライズムと明治四十年ごろから盛んになった自然主義文学との間には断絶があるとするのが普通の見方である。また、明治二十七年の美妙スキャンダルは、もっぱら美妙没落のきっかけとして注目されてきた。

しかし、すでに指摘されていることであるが、ゾライズムは、美妙スキャンダルの頃すでにかなり知られており、美妙の行動もゾライズムの実践とみなされていたことが分かる。美妙の行動は、ゾラという実験小説を、實際経験を観察し記録したものと理解し、それを私小説的に実行しようとした結果であり、当時の文壇も同様に理解していたことが分かる。当時の評論を見て行くと實際経験としての「実験」を重視する風潮は、その後も続き、私小説の発生に結びついたと考えられる。

本稿では、この翻訳語のいたずらが日本的な私小説の誕生に役かっていた可能性について、美妙スキャンダルを中心に論じていきたい。

一、美妙スキャンダルと「実験」

明治二十七年十一月二十九日から十二月二日まで四回に

わたって、『万朝報』は、「山田美妙斎大詐欺を働く」の見出しの記事を連載した。そのあらまは、石井おとめという凄腕の売春婦を美妙が騙し、偽手形をつかませた上で女が溜め込んでいた大金を騙し取ったというものであった。『万朝報』の記事がどこまで信用できるものかどうかは怪しいものだし、美妙もその記事に間違いがあると指摘しているが、問題なのは、こうした報道に対して届いた弁明として、同じく『万朝報』に次のような美妙の手紙の要約が載せられたことである。

妖艶の巢窟たる浅草公園にても殊に腕前の凄しと云はれし石井おとめ、其人と為りハ初めより知りて、之を種にせんと思へばこそ近づきたれ、顧れば茲に三五年、其間の研究にて、人事千百その怖るべくその悲しむ可く、その笑ふべき所も聊かハ覚えつ。(中略)小説中の人物も亦更に詐らず、かくさず、総て現存の人を其俣に描き出して事の真偽を一举に示すべく、近くハ浅草最寄の酒楼茶席などに奉侍する婢女下僕の類に至るまでも筆に任せて列挙せん(『万朝報』明治二七年一月二日五日)

つまり、美妙は石井おとめとの関係を認めた上で、それ

は小説の人物を實際通りに写し取る研究の取材の為だと居直っている、と解釈できる記事が出されたわけだ。

この記事について、嵐山光三郎氏は、「私小説宣言ともいえる内容」であるとする興味深い指摘をしているが、評伝という性格もあり、私小説との関係についてそれ以上踏み込んだ考察はなされていない。

さて、単に醜聞が報じられただけならば、それはそのままで済んだのかもしれない。しかし、ここで美妙が自分の取った行動が小説の取材のための名分であると主張している、との記事が報じられ、しかも記事に間違いがあるとしながらも、美妙が石井おとめとの関係そのものを何の臆面もなく認めたことは、坪内逍遙による手厳しい批判を呼ぶことになった。逍遙は、「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」を『早稲田文学』七十八号（明治二七年一二月）に掲載して次のように非難した。

小説作者の主題は人なり、人の性情行為なり、不義醜徳も実感を挑発せざるやうに描かるゝ限は、小説脚本の品題たり、かるが故に小説家は、其の材料を得んが為に、不義醜徳に接触するの権利ありや。

一を聞いて十を知るものはあり、一端を觀察せずしては二をだに想像し得るものは稀なり。かるが故に、

小説家は其の主題の素を自家の実験に求めざるべからざるか。所謂実験とは如何。不義醜徳を觀察するの謂か、みづから之れを行ふの謂か。若し後者なりとせば、竊盜の内幕を描かんとするときは、みづからまづ竊盜たり、姦夫の心術を写さんとするときは、みづからまづ姦通を試みざるべからず。（中略）或は所謂実験の義は、単に醜徳を觀察するの謂なりとせんか、吾人は所謂觀察の、科学者等の謂ふ所謂觀察にひとしかるべきを信ず

この後、科学における觀察者は、完全な傍観者でなくてはならず、当事者に巻きこまれてしまつては、觀察者の資格を失う、といった内容が続く。

大雑把に言つて、不義や不徳も小説の題材になりうるものだが、その材料を得るために小説家は不義不徳に接する権利があるのか、と問いを起こし、美妙が小説の材料を得ために石井おとめに対し不義を行い、しかも反省の色が見られないことを非難するものであり、美妙が文壇から没落するきっかけとなった文章として知られているが、本稿の立場からは、第一に、逍遙が美妙の行動を「実験」と認定している点が、第二に、逍遙が、道徳的観点からすればこれは当然のことともいえるが、当事者として行なうかと傍

観者としてのみ観察するのかの区別にこだわりながらも、いずれにせよ「実験」とは実際に経験しそれを観察するという意味であると理解している点が興味深い。

二、当時のゾライズム受容

美妙は「実験」という言葉を使っていなかったにもかかわらず、小説のための実地研究を逍遙は「実験」であると認定している。この認定は当時妥当なものだったのだろうか。

ゾラの名前は明治十七年には紹介され、明治二十年代に入るとかなり知られるようになっていたが、ゾラの実験小説が本格的に紹介されたのは、明治二十二年一月、森鷗外による『小説論 (Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien)』(『読売新聞』明治二十二年一月三日)が最初だとされている。やや長くなるが引用する。

読者諸君は既に「エミール、ゾラ」の名を聞きしならん「ゾラー」は法蘭西「プロワンス」の人、現時の所謂自然派(「ナトラリスムス」の裨史は其創作せる所にして其自ら命じたる実験小説(「リヨ、ロマン、エクスペリメンタル」)の名は開明世界に噴々たり

此実験小説の語は「ゾラー」が資て小説論の第一篇の題目となしたる所にして蓋し之を法蘭西著名の生理

学者「クロウド、ベルナル」の著したる実験医学緒論に取れるなり

「クロウド、ベルナル」は曰く今の学問は視察「オブゼルワチシヨン」と実験「エクスペリマンタシヨン」との二に基くなり宇宙間にて人力の能く変化すべからざるものに逢へば学者、之を視察し其能く変化すべきものに逢へば学者、之を実験す医、若し活人体の作用の本真を悟らんと欲せば其視察の功を補ふに実験の績を以てすべし彼の病院、講堂及び試験室の内に入りて生活の臭穢蠕動の疆界(「フエチード、ウー、パルピタン」)に臨むに非ざるよりは真正の医学の発明を得べからざるは恰も銀燭、光を放つの広厦に入るものゝ先づ庖厨を過ぐるが如しと

「ゾラー」は直ちに此言を挙げて之を小説の結構に應用したり試に其書中の事物は皆な「ゾラー」の分析と解剖とを経たり「ゾラー」の人情を分析するや湯液の酸澆を扱はず其世態を解剖するや刀鋸の鈍鋭を問ふことなし而して此分析、解剖の順序を叙列したるものは其所謂「エトユウド」なり

実験小説がベルナルの『実験医学序説』を小説に應用したものであることから、実験と観察(鷗外の訳文では

「視察」という、ゾライズムの合言葉とでもいうべき術語まで、要領よく紹介されている。文中、「フエチュード、ウー、パルピタン」は原文では、*le terrain feudo ou palpitant de la vie*（生命によつて顫動している悪臭のある領域）の一部「顫動している悪臭のある」の一部に該当する。なお、『しがらみ草紙』二十八号（明治二十五年一月）所載の「エミル、ゾラが没理想」付録に「医にして小説を論ず」と改題して掲載された時には、「実験小説」は「試験小説」と改められているが、このことについては後述べる。

同じ年の八月、『国民之友』は、「仏国現今實際派文学者の巨擘エミール、ゾラの履歴性向一斑」と題して、五十九号（八月二二日）から六十号（八月二二日）の二回にわたつて、ゾラを取り上げている。その中でゾラが自分の小説を書く方法について語つた言葉として次のような記事が載せられている。

余が一の小説を著すや、如何なる事件の起り来るべきやまた如何なる諸人物の其中に顛れ来るべきや其発端其結局皆曾て之を予定することなし、余は只茲に一個の重なる人物を定め置き、（男子にせよ婦人にせよ大率余が旧知の一人を）其人物の性向、其の生れ出た

る家族、其始めて受け得たるべき感触、及其人物が社会に於ける階級等を熟考し、次に此の人物が共に相接すべき人民、其の隠栖、其の呼吸する空氣、其職業、習俗、及び一日の中に起り来るべき些細の事までも實際に就て之を觀察するなり、斯くなし居る中には脚色の中に入るべき幾多の景趣突然我脳中に入り来る、此景趣の連続こそ吾主人公の旅行し去るべき路筋の里程標となるものなり（中略）且また余は自ら彼の下層社会の範圍の中に暫く住したることあれば、其人民の模様を察し、實際の話聞き、實在の事を知り、其の社会に通用する言語を学び、其の模様景趣会話の小片皆之を吾記憶の中に貯ふれば、我脳中には已に幾千の漫散紛雜せる片々を以て組織したる一箇の秩序もなき小説を有するなり、諸尤も困難なるは此等の細片をば一糸に連貫することなり、余は斯くするに想像を用ひず、寧ろ冷淡なる論理的の法を用ゆ（『国民之友』六〇号、明治二十二年八月）

こちらの方には「実験小説」という言葉自体は出てこないが、ゾラの小説作法についてはより詳しく具体的に紹介されている、といえるだろう。

いづれにせよ、明治二十二年の時点でゾラの小説は、

「実験と観察」によって科学者や医学者が人体を分析解剖するように、下層社会や社会の暗黒面を实地に観察し、科学的に分析解剖する小説として捉えられていたことが分かる。

さらに、ゾラの影響のもとで作られた山田美妙『いちご姫』（明治二二年）、尾崎紅葉『むき玉子』（明治二四年）なども現れており、この頃すでにゾラの名は文壇に知られていた。

さて、先述したように、鷗外は、『小説論』を『しがらみ草紙』二十八号（明治二五年一月）所載の「エミル、ゾラが没理想」付録に「医にして小説を論ず」と改題して再度掲載した。いうまでもなく「エミル、ゾラが没理想」は逍遙との没理想論争の中で、鷗外が逍遙をゾラに見立てていこうとした論文であり、当事者の逍遙がこの論を読んでいることは間違いない。ここで鷗外は「実験小説」を「試験小説」と改訳しているが、当時の辞書を見ると、棚橋一郎、ダブルユウ、イーストレキ訳述『ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙』（明治二一年）には「experiment, v. i. ed. -ing. 試す、試験スル、実験スル」、尺振八訳『明治英和字典』（明治二二年）には、「experiment-ed -ing (自) 試験スル、試ムル、実験スル」などとあり、当時「experiment」の訳語としては「実験する」「試験スル」

の両方が行われていたことが分かる。かつまた、「エミル、ゾラが没理想」本文に「ゾラが小説論についての没理想論は試験小説 Le roman experimental」と題したる数篇の「エッセイ」にあり」と原文つきで表記されており、逍遙はこれも読んでいたはずである。したがって、明治二十二年の時点で鷗外が紹介した「実験小説」という概念について、逍遙が注目しなかったとは考えにくい。百歩譲ってその時点では逍遙が仮に注目しなかったにしろ、明治二十五年の時点では確実に「実験小説」とゾライズムとを結び付けて考えていたはずである。

さらに、明治二十七年頃になると、『早稲田文学』では、ゾライズムはすでに周知の概念として取り扱われ、しかも否定的な記事が目立つ。

エミール・ゾラは此の科学の勢力に駆られて仏国に現出せし写実派の中心点なり自然主義（狭意）現世主義の旗下に立ちて、想像力に代ふるに観察力といふ武器を帯びたる者これなん昨日までの勝利軍なりし（『早稲田文学』明治二七・一・一二、文学現象）

天地の美を描き、人心の奥妙を写すは文学者の本領なるに、今の文学者の多くは唯パンを得んが為めに媚淫

猥の業を弄し社会はた之れを歓迎す。彼らが描く所は社会の影にあらでむしろ自己の実験なり。(『早稲田文学』明治二七・一〇・一〇、時論)

特に後者は、ゾラ一派の文学者が自然主義を振りかざしながら、好んで社会の暗黒面を描き出していることを批判しているのだが、ここにも「実験」という語が見られる。

しかも、美妙の醜聞が報ぜられた『万朝報』には「或人曰く美妙齋曾て窃盗秘事を著して世人を驚かす之亦所以ある哉と又曰く美妙齋の小説多くは残忍刻薄に妙を得たり是れ其人の生来なり是に由て観るも美妙齋が此詐欺をなすも又尤もなる次第なり」(二月二日)であるとか、先の美妙の弁明と称する手紙の直後に「斯の如き弁解を得て我社ハ殆ど云ふ所を知らず、其の判断は世人に任かせて、兎に角美妙山田武太郎君が文章益々多祥ならんを望む、人情を探らんが為め身先づ人情の奴となりて其の窟に投ず、洵に美妙齋ハ熱心なる作者なる哉、愈々以て其の将来の造詣する所る測る可からざらんとするなり」(二月五日)という記事がある。両者とも美妙の小説の内容と美妙の実体験を結び付けているが、特に後者は、その真意は那楡であるにしても、前に引いたような美妙の弁解を受けて、少なくとも表面的には、美妙の行動を小説のための実地調査とし

て認定する書き方になっている。

このような状況の中で逍遙は、「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」を発表したわけである。これは明らかに美妙の行動とゾライズムの「実験」とを関連付けた上での非難だと考えられる。

三、「実験」という語の意味

とはいっても、逍遙がゾラのいう「実験」を正しく理解した上で非難していたとはかぎらない。そもそも、当時「実験」という語は、どのような意味で使われていたのだろうか。『日本国語大辞典』(二版、小学館、二〇〇一年)で「実験」を引くと第一義に「実際に経験をすること。実際に遭遇すること。体験。」とあり、第二義に「自然科学で、一定の条件を設定し、その下で自然現象を起こさせ、それを観察やまたは観測し、記録すること。その結果を予測や理論と比較し、正しい考え方を実証し、さらにその先に発展する自然科学的手法の一環をなす。エクスペリメント。」とある。第三義に「実検」に同じとあるが、これはここでは関係がない。第一義、第二義共に幕末以降の用例が挙げられており、近代以降に定着した翻訳語であることが容易に想像される。第二版には初版にない項目末の「語誌」の解説が増補されていて、「明治初期に「実験」は

「経験」と混用された時期もあったが、「経験」は哲学に、「実験」は自然科学にという使い分けが徐々に生じ、明治三十年代以降に定着を見た。」とある。

前に引いた「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」の中で逍遙は、二つの意味を想定していた。第一は、本人が当事者として実際に行動を行つてみて体験することであり、第二は、本人は傍観者として科学者のように事件を観察するという意味である。本人が当事者となるか傍観者となるかの違いはあつても、どちらとも『日本国語大辞典』の第一義、すなわち実際経験の意味である。

これは「実験」と「経験」とが混用されていたとの指摘に当てはまる例であるが、鷗外の場合はどうであつただらう。再び引用する。

「クロウド、ベルナルル」は曰く今の学問は視察「オペレルワチシヨン」と実験「エキスペリマンタシヨン」との二に基くなり宇宙間にて人力の能く変化すべからざるものに逢へば学者、之を視察し其能く変化すべきものに逢へば学者、之を実験す医、若し活人体の作用の本真を悟らんと欲せば其視察の功を補ふに実験の績を以てすべし

人間の力で変化させることができないものは観察するというのは、たとえば気象の変化であるとか天体の運行などについて考えれば分かりやすいだろう。これに対して人間が変化させることのできるものを実験するというのは、化学や物理の実験のように、人間が一定の条件を設けて現象に関与できるものである。すなわち、ここで鷗外は「実験」という語を現在の自然科学でいう「実験」、つまり、『日本国語大辞典』の第二義で使っているわけだ。その次の、医学では、観察だけでは不足のところは実験するといふ内容も同様に考えることができる。

このように鷗外は、自然科学や医学についての説明では「観察」と「実験」とを峻別していたのだが、小説についてとなると話は曖昧になる。先の引用のようにゾラの小説に書かれているものはすべて彼の分析と解剖を経ているという説明のだが、これらと自然科学的な「実験」がどう結びつくのか、はつきりと読み取ることができない。

四、ゾラの「実験」

では、当のゾラは、どのように小説で「実験」を行うと主張しているのだろうか。『実験小説論』を見てみよう。

Claude Bernard a, toute sa vie, cherché et combattu

pour fair entrer la médecine dans une voie scientifique. Nous assistons là aux balbutiements d'une science se dégageant peu à peu de l'emprisonnement se fixer dans la vérité, grâce à la méthode expérimentale. Claude Bernard démontre que cette méthode appliquée dans l'étude des corps bruts, dans la chimie et dans la physique, doit l'être également dans l'étude des corps vivants, en physiologie et en médecine. Je vais tâcher de prouver à mon tour que, si la méthode expérimentale conduit à la connaissance de la physique, elle doit conduire aussi à la connaissance de la vie passionnelle et intellectuelle. Ce n'est là qu'une question de degrés dans la même voie, de la chimie à la physiologie, puis de la physiologie à l'anthropologie et à la sociologie. Le roman expérimental est au bout.

(原文引用) Zola Emile Oeuvres complètes Edition établie sous la direction, Henri Mitréland, Paris, Cercle du Livre Précieux 1968 に於て)

クロード・ベルナールは生涯を通じて、医学を科学的な道程に押しすすめるために研究し、たたかった。そ

こには実験的な方法のおかげで経験主義から次第に抜け出し、真理の中に根を張ってゆくひとつの科学のまだ幼いすがたがみられるのである。クロード・ベルナールは、化学や物理で無生物の研究に应用されたこの方法は、生理や医学での生物の研究にも应用されねばならないことを明示している。そこで私は、もし実験的方法が肉体的な生命を明らかにできるものならば、それはまた感情的または知的な生命をも明らかにできるはずであることを証明してみるつもりである。そこには化学から生理学へ、ついで生理学から人類学または社会学へと通ずるおなじ道程上での程度の問題しか存在しない。実験小説はその果てにあるのである。(河内清訳、『世界文学大系』ゾラ』筑摩書房、昭和三四年)

ゾラは、この『実験小説論』の中で徹頭徹尾クロード・ベルナールの小説への応用者を以って任じている。すなわち、ベルナールが医学において実験的方法を主張するまでは、化学や物理のような実験的方法は、人体のような複雑な生命体には応用できないので、医学は勘と経験に頼る技術に過ぎないと考えられていたのだが、ベルナールは、実験的方法を医学に応用し、医学を科学的な学問とすること

を主張した。医学のように複雑な生命体に実験的方法が応用できるのであれば、より複雑な人類、社会にも応用できるのではないか、というのがゾラの主張であり、それが実験小説の方法だといっているのである。

ここでゾラのいう「実験」は、当然、自然科学的な「実験」、つまり、『日本国語大辞典』の第二義のほずであるが、その「実験」を小説に應用するということは、具体的にどうすることなのだろう。ゾラは、ベルナールによる観察家と実験家の区別、すなわち、観察家は純粹に自然を観察するだけなのに対して実験家は検証の目的で自然に働きかけるものであるとの区別、および、実験とは検証の目的で誘発された観察であるとの定義を紹介した後、次のように続ける。

En revenant au roman, nous voyons également que le romancier est fait d'un observateur et d'un expérimentateur. L'observateur chez lui donne les faits tels qu'il les a observés, pose le point de départ, établit le terrain solide sur lequel vont marcher les personnages et se développer les phénomènes. Puis l'expérimentateur paraît et institue l'expérience, je veux dire fait mouvoir les personnages dans une

histoire particulière, pour y montrer que la succession de faits y sera telle que l'exige le déterminisme de phénomènes mis à l'étude.

小説に立ちもどれば、おなじように小説家もまた観察家と実験家とで成り立つことがわかる。彼の中の観察家は観察したとおりの事実を提供し、出発点をおき、やがて諸人物が進行し諸現象が展開する堅固な地盤をもうける。ついで実験家があらわれて実験を設定する。つまりある特定の物語のうちに諸人物を活動させ、ここでは諸事実の継続が研究課題である諸現象のデテルミニズムが要求するとおりになることを示すのである。

「デテルミニズム」は、ふつう決定論と訳されるが、ここでは原因と結果の関係くらいに取っておいた方がよい。小説でも科学と同じように観察家が人間や社会を観察し、実験のための基礎を作る。そして、実験家は、設定された小説世界の中で実際に登場人物を動かしてみ、仮説として設定した人生や社会における原因結果の関係を検証する、それが実験小説だ、というのだ。以上のようなゾラの考え方は次の文からも端的に知ることができる。

Le problème est de savoir ce que telle passion, agissant dans tel milieu et dans telles circonstances, produira au point de vue de l'individu et de la société.

問題はある情熱がある環境やあるいくつかの状況のなかで行動したら、個人的、社会的見地からみてどんな結果を生むことになるかを知ることである。

このような小説が実際に可能なかはともかくとして、いま風にいうならば人生のシミュレーションを空想世界の中で実際に行い、それを観察して記述するのが実験小説だということになる。すなわち、ゾラのいう「実験」は自然科学的な「実験」だったのだ。

五、「実験」から私小説へ

ゾラは自然科学的な意味での「実験小説」を主張したわけだが、その主張は、当時の日本では正しく理解されなかつたのである。逍遙にとつての「実験」は、当事者にせよ傍観者にせよあるいは科学者のようににせよ、実際に経験したことを観察することであつた。鷗外が再録において「実験小説」を「試験小説」と改訳したのも、当時におけ

る「実験」という語の語感から来るものであろう。すなわち、少なくとも自然科学における「観察」と「実験」の違いについて熟知していた鷗外は、「実験」と訳した場合、実地経験・実地観察という誤解を生む可能性を感じ取つて「試験」と改めたと考えられる。『国民之友』の記事は、ゾラの実験小説の概念をかなりよく伝えていたが、それでも詳細な実地観察に基づき、想像を交えずに社会の現実をありのままに書く程度の理解であろう。ここでは「実験小説」という語は用いられず「写実的小説」という語で紹介されている。

このような当時の理解を踏まえて考えてみると、美妙が醜聞を報ぜられてもそれを否定せず開き直つたのは、単なる開き直りの弁明ではなく、大真面目でゾライズムの実践として実地経験をを行っているつもりだつたと考えるのが妥当であろう。前述したように当時すでにゾライズムはかなり広く知られていたし、美妙自身影響を受けていた。逍遙は、「小説家は実験を名として不義を行ふの権利ありや」で美妙の開き直りに対する世間の批判が手ぬるいことに切齒扼腕している。このことは美妙のみならず当時の世間にもゾライズムについて美妙のような考えを容認する雰囲気があつたことを示すものだろう。やや、時期は下がるが『帝国文学』に次のような記事が見える。

明治三十三年一月)

筆を特殊の社会に染め、特殊の人格を描出せむとせば、身を親ら其境に投じて実践経験の功を積まざる可らず。然らざれば、平常其社会に出入し、異なりたる場合に於て、特異の機会に於て、異なりたる人物に就て、精確緻密の観察をなし彼等の生活家庭の 状態、彼等の用語、座作進退に至るまで、咀嚼會得し了せるの後に筆を下すに於て、初めて歴々として特殊なる人格の躍動を見るを得可きなり(『帝国文学』明治三二・八・一〇、雑報)

これは『中学世界』の読者へ向けての言葉であるから、前の例ほどに徹底した観察を要求しているわけではなからうが、それでもゾラ的な発想は明確にうかがえる。花袋はやがて明治四十年、日本の私小説の元祖ともいえる『蒲団』を発表するが、『蒲団』発表後になつても、花袋は次のように主張する。

これなどは、先に引いた『国民之友』のゾライズムの紹介と合致する内容である。小説を作るにあつて「実験と観察」を重視した記事といえる。さらに田山花袋は、翌明治三十三年の「懸賞小説の評」で次のように述べる。

諸君が小説の筆を染めやうと思つたなら、好く實際を観察して、その複雑した實際の中から、人間の性格はどういふ発展を為るか、箇人の性格はどういふ運命を作るか、先天的傾向はどの点まで人間の基本思想に關連するかといふ事を好く考へて、そしてそれを成るべく静かな落付いた態度で、刻苦励精して筆紙に上すことが必要であらうと思ふ。(『中学世界』第三卷一五号、

我れ以外の人間や物象の細かいサイコロジイを何うして探るかと言ふに実験と観察により作者の主観を鋭敏にする事である。即ち物を見る頭、心の修練が必要になる。この修練が積みさへすれば 対象の微細な一類型的でない個性的な心理までも見破れると信ずる。(『描写雑論』『早稲田文学』明治四二・一〇・一)

これなどは、経験の意を持つ「実験」の用例がこの頃まで残っていたことを示す例だが、本稿の興味からいうと、花袋は『蒲団』執筆以前もそれ以降もゾライズム的な発想を持つていたこと示す例である点に着目したい。『蒲団』は花袋の「実験と観察」によつて成立した作品だということができるからだ。

おわりに

ゾライズムの文学と明治四十年頃以降の自然主義文学とが性格を異にするものであることについてはその通りである。ところが、当の花袋は『蒲団』執筆後も、ゾライズムの合言葉ともいえる「実験と観察」の重要性を主張していたのだ。それは「実験」とはゾラのいう科学的な実験ではなく、実際に体験し詳細に観察するという「実験」理解によるものだった。かつまた、実地体験と観察とを重視する日本のゾライズムの主張は、美妙のスキヤンダルが起った明治二十年代にまで遡ることができる。すなわち、「実験」という翻訳語の一筋の糸によって「実験小説」から「私小説」の誕生までをたどることができるのだ。

これはやはり翻訳語という、何だか分からないけれども価値がありそうなものというシロモノの働きとみる事ができるだろう。フランスのお偉いさんが「実験」を主張しているのだからしたがわなければならぬ、というわけだが、肝心の意味のほうを穿き違えてしまったのである。

ところで、本稿では、「実験」を experiment の訳語としてのみ取り扱った。しかしながら、たとえば綱島梁川が「子が見神の実験」（明治三八年）などというとき、その「実験」には経験という語を超えた重さがある。あるいは、

当時の作家が「実験」を重視したのには、「実験」という語に「経験」を超えた特別な思い入れをもっていたからかもしれない。こ自然科学的な「実験」の意味とは違った「実験」を「経験」と区別して用いる例も存在する。これについてはさらに考えてみる必要がありそうだ。

注

- (1) 本間久雄氏は「この後期の自然主義（明治三十九年以降のもの。論者注）は、前期のものが、ゾラを典範としてゐたのは異り、ゾラとは殆んど無関係のまゝに出発してゐる。」（『続 明治文学史』（下巻）（東京堂出版、一九六四年）と述べているが、この考え方は現在でも一般的である。
- (2) 本間氏に指摘がある（注1に同じ）。ほか、吉田精一『自然主義の研究』（上巻）（東京堂出版、昭和三〇年）は明治二十年代のゾラの紹介・影響について詳述している。
- (3) 嵐山光三郎『美妙、消えた』（朝日新聞社、二〇〇一年九月）
- (4) 本間氏（注1に同じ。）は、明治一七年刊の『維氏美学』にゾラの名があることを指摘している。